

随想



「南座と栄光館」

（京都でなくてはならぬもの）

楠 敏也

（みやこフィルハーモニック指揮者）

’83年大学法学部卒業

小学校五年の社会の授業で知った「新島襄」に感動して入りたいと思った同志社、念願叶って迎えた礼拝堂での中学校入学式の冒頭、圧倒的なオルガンの響きの中で歌った讚美歌三二番。以来学業はそっちのけで中高ホザナコーラス、大学グリー

クラブで音楽する心を育てて戴いた。大阪音楽大学での四年間というおまけまでついて、現在は指揮者として音楽を生業にしている。

昨年十一月音楽が縁で大学リーダー・クラント・コールと共に京都市にとつては九番目の姉妹都市となるチェコ共和国の首都プラハ市を訪れた。姉妹都市盟約締結を記念した初の文化交流の一貫として二つの音楽会に出演、リーダークラントにとつては昭和八年の創立以来初の欧州公演、彼らの大活躍の様子を書きたいけれどもそれは別の機

会に譲る。

プラハは「世界遺産」に登録され、中世以来の歴史と文化が現代に息衝く街、後に訪れたウィーンの町並が新しく見えるほど。京都の文化財がかるうじて点として存在しているのに対し、プラハやウィーンはそれぞれ町中一面といった感じ。それを守り、住み続けるには功利性を度外視にする勇気が無ければとても出来る事ではない。経済的には決して豊かとは言えない国の市民から学ぶべき事は多い。

築後五十年以上たった建造物を対象にした保護制度として昨年導入された国の「文化財登録制度」の初の対象として京都からは歌舞伎発祥の地「南座」が唯一選ばれた。現在の南座は昭和四年竣工の外観はそのままに、平成三年内部設備を一新、文化財を活かしながら保護する事の出来る好例である。

昭和七年竣工の「栄光館」と

その東西に配された「静和館」「ジェームス館」との調和の見事さは学内随一、女子部にありながら入学式に卒業式、クリスマスや音楽会等々卒業生には思い出深い場所のはず。先日教会の礼拝に出席するため久し振りに中に入って驚いた。出席者の少なさもさることながら、内部が呼吸していない、まさに瀕死といった感じ。なるほど人の集まらない建物は死んでしまう。集まらないのは魅力がないからなのか。ならば魅力あるものにするれば良い。南座の例もある。壊さなくても今のままで充分出来る。新しいだけが能ではない。故人曰く「温故知新」と。但し金はかかる。それが文化である。しかし儲からない。それも文化である。

最後に誇らしい話題を一つ。先年京都市交響楽団のコンサートマスターとして当地に來られた渡邊穰氏がオーケストラの古都ザルツブルクの夏期講習の

おり、高名な音楽家シャンドール・ヴェーグから言われた言葉

「京都に住まなければ」

東京ではだめだ」

二つの仕事

小邦宏治

(岡山理科大学教授・経済ジャーナリスト)

'63年大学経済学部卒業

卒業以来三十数年間、同志社とはほとんど関わりがなかったが、昨年から二つの仕事が舞い込んできた。

一つは校友会の活性化。京都本部はさておき、東京支部は毎年、忘年会と懇親会を一回開催している程度だが、それさえ年々参加者が減り、もう一つ元気がないという。そこで「どんな方法でもいいから活性化を考えてくれ」と東京支部幹部の方から話が持ち込まれたのだ。ちょうど私が五十五歳になり

毎日新聞社を定年退職、経済ジャーナリストの肩書きでモノ書き商売を始めた時、「あいつなら時間が有り余っているだろう」と思われての指名だったのだろう。

要は東京支部の別働隊のような組織をつくり、支部活動を支援することだが、簡単なようで意外に難しい話である。どうすればいいか、考えあぐねている内、あの悪名高き「ネズミ講」を思い出した。子を次々に増やしていく方式だ。これでカネを儲けるのなら出資法違反だが、活性化の賛同者を集めるのだから問題はない。

早速、同志社卒の親しい仲間数人に集まってもらった。そこで二カ月後、一人が三人の友人を勧誘し、二十人程度の発起人会にこぎつけた。そこで決まったのは、会の名称を「同志社自由懇話会」にするということだけ。会則も名簿も作らず、誰が何かを呼びかけたとき、賛成

すれば参加しようということになった。

言いだした以上、最初の呼びかけ人になるしかない。月並みだったが、パーティを企画した。ただ、参加者を五十人程度とし、全員に一分間スピーチをしてもらうことにした。仕事の話、趣味の話、なんでも好きなことをスピーチしてもらい、パーティ後の交友に役立てようという狙いだった。今年一月末、プレスセンターで開いたが五十六人が参加、実に楽しい会となった。これが縁となって、仕事の取引が始まったケースもあると聞いた。

もう一つの仕事は同経会が今年から始めた寄付講座の講師探し。社会人にも公開しているこの講座は、第一線で活躍している経済界、官界のリーダーを講師として、ことで人気を集めているという。

来年度の「目玉講師を探せ」というのが私に与えられた仕事

である。経済記者二十五年の実績をかけて、学生諸君に喜ばれる大物講師を紹介したいと思っている。

私のサイエンススクール

中村浩美

(科学ジャーナリスト)

'68年大学法学部法律学科卒業

私は近年、「子どものためのサイエンススクール」という試みを、プライベートに続けている。理工系離れや不登校など、子どもたちの教育をめぐる負の要素がクローズアップされている。今、サイエンスやテクノロジーの大切さ、面白さを理解してもらうことと、発見や体験の素晴らしさを実感してもらおうと始めた試みだ。

法学部出身(ゼミは国際法)にもかかわらず、現在は科学ジ

ヤーナリスト、航空評論家というような肩書きで仕事をしている私としては（これも新島精神のあらわれか、ちよつと大げさに言えば、ある種の使命感を感じて始めたものだ）。

NASA（アメリカ航空宇宙局）やNASA DA（宇宙開発事業団）提供の宇宙から見た地球やスペースシャトルの映像、TRIC（東海大学情報技術センター）が解析した衛星画像などをふんだんに使い、子どもたちが参加できる実験などもまじえた、楽しいイベントだ。子どもたちが学ぶことの楽しさ、発見することの面白さを実感できるように、表現方法や構成でも工夫を凝らしているつもりだ。

しかもこのサイエンススクー
ルは、出張授業というか出前教室というおうか、要請があれば全国どこへでも出掛けている。もともとこれは、国などの催しも多きさまざまな刺激に出会うチャンスに恵まれた首都圏や京阪

神よりも、地方の子どもたちに参加の機会を与えてあげたいという発想から企画したのもでもあった。現在は、主に地方自治体に主催していただき開催しているが、もちろんコンセプトに共鳴してくださるなら、スポンサーは企業でも学校でも個人でもかまわない。

このプライベートな試みも、熱心に運営を担当してくれるスタッフや、宇宙飛行士の毛利衛さんをはじめとする、理解ある研究者の皆さんや関係機関のご協力のおかげで、次第に軌道に乗ってきている。今年は山形県上市市、奈良県大和郡山市、長崎県外海町、東京都多摩市、それに東海大学で開催が決まっている。

現在のカリキュラムは、宇宙や地球をテーマの中心にしている。それは子どもたちが最も興味を抱いてくれるジャンルだからだが、宇宙や地球への関心がサイエンスやテクノロジーの理

解へ、さらに広がってくれることを期待している。子どもたちは驚異の映像や、身近な材料を使っての理科実験に、瞳を輝かせて参加してくれている。いまの好奇心や関心、そして発見や体験の感動を忘れずにいてほしいものだと思う。

残念ながら昨今の教育環境や社会環境は、そういう子どもたちの大切な芽を摘み取る方向へ作用しているように思えてならない。私のサイエンススクールは、小さなプライベートな試みではあるものの、現在の日本のシステムに、一石を投じるものでありたいとも願っている。

メキシコのメロン

庭田茂吉

（大学文学部嘱託講師）

子供を連れて散歩をすると面白いこともある。一人では行か

ない所に寄り道することがあるからだ。そこで思いがけないものに出くわしたりする。知らない家や店、奇妙な空き地や看板。これはこれで楽しいものだ。

この時は、散歩の帰りにコンビニ風の店の中をうろろろしていた。娘が面白いものを見つけたらしい。「メキシコのメロン」、店の奥で、彼女のたどたどしい声がする。駆けつけると、早速質問が待っていた。「おとうさん、メキシコのメロンって何？メロンはメロンか。あたし、メロン好きねん、知ってるやろ。メキシコのメロンか、ふううんメキシコか」

それは箱に入っていたが、一見したところおいしそうには思えない。箱には、「とてもおいしいメロンです」とマジックで小さく書かれていたが、その言葉は逆じゃないかとさえ言いたくなるような色だ。それは、白っぽくすんでいて、ところどころに黄色味がかつたまだら模様

がある。少し腐りかけなのか、変色しているところもある。それに、こんな寒い冬の時期に、メロンと言われても、とてもおいしいとは思えない。ところが横で娘が言う。「おとうさん、『とてもおいしいメロンです』だつて。買おうよ、あたし、メロン好きねん、おとうさん、知ってるやろ」

二人でごちやごちややっていたら、店の人が近づいてきてこう言った。「すぐおいしいですよ。季節はずれなのは、メキシコのメロンだからです。騙されたと思って、一度食べてもらん。腐っている訳ではないのです、これはこんな色なんだから。今がちょうど食べ頃です。もう今しかない、これ以上たつと、変な苦味が出てまづくなる。だから安く売っているんです。どうですか、試してみても」

どうも疑わしい。値段が安いのがかえってあやしい。それに、この語り口、どう考えてもおい

しいとは思えない。でもいいか、騙されてみよう。何と言っても、メキシコのメロンなのだから。結局、二個選んでもらつて家に戻った。

夕食の後、三人で食べた。「季節はずれのメロンねえ、やつぱり止めた方がよかつたかなあ」「でも、メキシコのものだから、ほらいい香りじゃないの」「あたし、メロン好きねん、知ってるやろ」

ごちやごちや言いながら食べた後は、うまい、最高、ブラボ―。

今年の春、同じメロンが別の名で、今度は上品に並べられて、スーパーで売られていた。だが、そこにはもはや、あの冬の驚きはなかった。もちろん、あの疑わしいマジックもあやしい語り口も。

文化の経済効果

萩尾 瞳

(映画評論家)
71年大学文学部
英文学科卒業

夏のニューヨークが好きだ。いや、本当はメトロポリタン・オペラも始まるクリスマス前がベスト・シーズンだと思う。けれど、夏のニューヨークには、冬にはない特別の魅力がある。

その魅力のひとつが、セントラル・パークの催しだ。たとえば、オペラ・コンサート。広い芝生の仮設舞台でトップクラスのオペラ歌手が歌うのを、敷物の上でくつろぎながら聞くのは、とても贅沢な気分だ。目を上げると、暮れなずむマンハッタンのカイラインが美しい。また、ニューヨーク・シエイクスピア・フェスティバルの野外公演もある。星空を天井にした

デラコート劇場で、これもトップクラスのスタッフ、キャストによる舞台を楽しむ。なんとも、贅沢。

こんな催しが全部フリー(タグ)だというのも、嬉しい。企業の協賛金、個人の寄付金で運営されているのだけれど、スポンサー名はほとんど表に出ない。それでも、ちゃんとお金を出す企業や個人がいるわけだ。社会が豊かというのは、こういうことなんだと納得して、ますます贅沢気分になってしまふ。思えば、ロンドンの劇場の大半も、政府の助成金と企業や個人の寄付金で底支えされている。そういえば、バブル景気の頃には日本でもやたらメセナなのと騒いでいたつけ。でも、バブルが弾けたらそれつきり。あれって、いったい、なんだつたんだらう。まあ、当時も、税金に持っていかれるくらいなら、宣伝費として適当な公演やコンサートや美術展に使おう、

という程度の企業アプローチでしかなかったけれど。文化の発展に尽くすのは一種の社会的責任だと思うけれど、無償じゃできないというのなら文化に投資すると考えればいい。初期投資をきちんとやれば、文化は経済的な効果もたらすのだから。

個人的には、文化を第五次産業と位置づけてもいいのではないかとさえ思う。流通業、サービス業に続く、新しいマーケットをカバーするひとつの経済活動。ハリウッドの映画産業は、その代表的な例だろう。ハリウッド映画全てが文化とは言わないけれど、映画がアメリカの重要な輸出物なのは間違いない。ニューヨークでは、ブロードウェイ・ミュージカルが観光客誘致のポイントのひとつとなっている。イタリアの都市を旅すると、それらの街がルネッサンス文化の遺産で、いまもどれだけ潤っているかが分かる。

文化が消費を促し、一種の商

品になり得るのは確かなのだ。

映画や芝居やミュージカル、オペラやバレエ、美術館の素敵なものがあれば、人はそれに触れるためわざわざ出かけて行ってお金を払う。こうしたものには、周辺消費も期待できる。つまり、才能と十分な資金を注いで文化的に優れたものを作り出せば、経済的にもちゃんと見返りがあるってこと。消費が行き詰まっているいま、文化という次のマーケットを、もつとまともに見据えてもいいの、と思う。

もちろん、このマーケットが一朝一夕で成熟するはずはないから、かなりの長期投資にはなる。そりゃあ、政府や企業にしても、道路やビルやモノを対象にしたほうが経済効果としては分かりやすいだろう。でも、そろそろ、文化という産業の開発に本気で取り組んでもいい頃じゃないかと思うのだ。

昭和史に浮かぶ「新島像」

保阪正康

(ノンフィクション作家)

63年大学文学部
社会学科新聞学専攻卒業

昭和史の事件や人物を調べていると、ときに意外な発見をする。(創立者・新島襄)の姿が垣間見えたり、その存在の大きさに改めて驚かされたりもする。最近のケースから一例を紹介したい。

太平洋戦争の敗戦直後、東久邇内閣や幣原内閣で日本側による戦犯自主裁判構想があつたことはそれほど知られていない。連合国による戦犯裁判のまえに、日本側で戦犯を特別法廷で裁き、一事不再理を楯に抵抗しようと考えたわけである。これは二つの内閣の閣僚数人によってひそかに練られた節があるのだが、その中心に司法相の岩田

宙造がいた。当時七十歳で法曹界の有力者であった。敗戦直前には陸軍省の中堅幕僚によって岩田内閣が画策されてもいる。

私はこのところこの戦犯自主裁判構想に関心をもち調べているが、とくに岩田の考え方を知るべく資料を読み漁っている。

岩田は明治八年に山口県で生まれ、旧制山口高校から東京帝大に進んでいる。その岩田が明治二十六年五月ごろ旧制高校生として山口市の教会に英会話の練習と称して通っていた。岩田自身に宗教心はなかった。ところがあるとき米人女性宣教師から「神の存在」を説かれた。岩田は否定的な考えを述べる。そこでいろいろなやりとりがあつたあとに、その宣教師は「お前は新島襄先生のことを知っているか」と尋ねたそうである。岩田は「新島先生のことはいったことがあつた」と答えると、すぐに次のような質問を受けたという。「あの人がアメリカへ渡ると

き、最初に『もし神があるならば、私をしてそのことを知らしめよ』と祈った。お前はそういう祈りをすることができるか」

岩田は、「僕は神がいないと思うので、そういう祈りはできない」と答えた。それでもその女性宣教師は、信仰について熱心に説いた。岩田は終生信仰をもたなかったが、それでもこのときの体験が人生に大きな影響を与えたという。岩田が法律家として法理論万能主義でなかったのは、宣教師を通じて知った新島襄の人間像に由来しているように、私には思える。

戦犯自主裁判を行うために法案はこっそりと練られた。もしこれが実行されていたら、日本の戦後史は現在とは異なった姿をえがいただろう。私は、岩田の心中に刻まれている新島像が戦犯自主裁判構想のなかにも反映していると考え、今その鍵を解こうと努めている。

禁煙車の妙

堀田啓一

(高野山大学教授
56年文学部文化学科
文化史学専攻卒業)

大学二年生の時、はじめて明徳館の地下喫茶室で煙草を口にした。初期の段階は、煙草がおおびらに買えるよろこびと、ニコチンやタールの強さに戸惑い、ほとんどは友人に贈与していた。しかし、常習化するに従って、今迄とは逆現象を呈するに至った。その後、五年間と三年間の二度にわたり禁煙に成功したが、その都度一日の喫煙量がふえ大変なヘビースモーカーとなつてしまった。

ここ数年、月一回の学会の委員会へ出席の為、新幹線を利用して東京へ行かねばならないが、健康の為に往復の一度は禁煙車両に乗車している。

禁煙車両の乗客は概して女性客が多く、その他、子供づれの家族や老夫婦などが主流を占めている。その中、女性客にはグループ行動があつて、壮年層や学生層など興味深い集団構成である。特に快活でリーダー的存在の人がいて、車中での数時間を大事に享受しているようで、現代の世相を反映させているが如くである。

これらの行動は、車中の人々に様々な姿でうけとめられているだろうが、私にとってはリーダー的人物の思考形態に関心がもてる。旅を楽しむくさせようとする責任感からなのか、豊富な話題の出発点は、自己の身体とその周辺から始まりグループの笑いの渦をまきおこす。ダイエツト中とかで自分の昼食は少なめで、友人の弁当を称えつつお相伴に預かる。次いで話題は衣服から住居の問題へと展開し、多種多様な話が「泉の湧水」が如くである。

その内容は大地にしっかりと根をおろした、エネルギーでバイタリティーにあふれたものであつた。ただ異性からみて、思考の発想の展開過程が、自己中心から同心円的に周辺へと発展していき、観察力に優れ繊細さが兼ね備わっているということである。

弁解をするわけではないが、ユニット化された長方形空間内の数時間、一方通行による歴史的な一時停止である。禁煙車両という小空間は、平和な雰囲気の時を刻んでいく。等値概念からして、平和な世界の半数を原始太陽であつた女性が支えている。

国民学校六年の敗戦時、頭上を飛び交うアメリカ戦闘機グラマンやロッキードに、逃げ惑う必要のない自分に「平和の尊さ」を感じた頃が、再び思い合わせるこの頃である。

東京・京都・奈良 (寧楽への道)

松本太郎

(NHK放送博物館長)
'57年大学法学部
法律学科卒業

五十年前、東京は廃墟のなかに沈んでいた。小学校ならぬ国民学校に入り、国民学校を出た、昭和ヒトケタ最後の世代は、いまから五十年前の昭和二十二年、新制中学の一年生となる。中学への試験がなくなりホツとした年代でもある。人生最初の試験(入学試験)は、三年後の昭和二十五年、高校入試時におとずれたが、なんとかパス。この年六月朝鮮戦争勃発の号外の鈴を神田・書籍街できく。日本の景気はこの辺りから上向き、昭和二十六年、平和条約調印となるが国内では、昭和二十七年には皇居前騒擾事件、吹田事件

などが相次ぐ。この年末、同志社受験。試験大嫌い人間にとつて、当時まだ珍しかった推薦制度は垂涎の的。都立高校の学級担任に推薦の依頼をしたが、当校での推薦者は、開校以来芥川龍之介だけで、君などは……」
といわれ、仕方なく正式受験となる。筆記試験に加え、面接試験もあり、中身は忘れたが、すごく人間味があるなと感じた記憶が残っている。
昭和二十八年二月NHKテレビの本放送開始。桜花匂う四月勇躍して京都入り。まだ外食券食堂が存在していた時代である。関東の者には市電・車掌の関西弁での駅名呼称がわからず、苦勞する。五月は京・葵祭り、それに続く法学部主催の比叡越えハイキングは京都はじめて人間にとつて有り難い催しであり友達もでき始めた。リーダー高橋貞三(行政法) 法学部長の歩き姿と温和な笑顔がいまでも目に浮かんでくる。当時の法

学部には、田畑忍(憲法)、滝川春雄(刑法)、谷田貝三郎(民法・ゼミ)、恒藤武二(労働法)、服部栄三(会社法)などの名教授がおり、恒藤恭(法哲学)、田畑茂二郎(国際法)等個性的な先生方の講義も魅力的だった。英書講読は若き加藤正男先生(現名誉教授)。研究室には土井たか子氏の姿もあった。
大学の友人に榎原市内八木に住まいのある者がいた。ここから奈良・大和との付き合いが始まる。家族的なあたたかみのある榎原の家にはよくお邪魔させていただいた。ここを起点に、北和の奈良市内および周辺、飛鳥などの中和から吉野などの南和と、大和路各所を彷徨い歩いた。三月に行われるお水取り・東大寺修二会に出会ったのもこの時期。ここ数年間、毎年必ず参籠しているが、この行は当然ながらも、五十年前と何等変わらない。もっとも一二四五年の永きにわたり、たとえ戦乱にあ

おうとも、世界の平和と人類の幸福を祈り、一年たりとも欠かすことがなかったのだから。
時・空を超えた、ほかとは異なる光を放ってきている。まかな不思議な縁で、東国人タローは学生時代を京都で終え、六年前にはNHK現役を奈良で締め、ハイビジョンでの正倉院紹介もできた。幼時ラジオ放送を聞き出してから約六十年、NHKで放送の仕事に携わってからも四十年を越えた。日本全国、世界各地にお邪魔しているが、さすらいの旅は、シルクロードの終着駅と同じく、寧楽(なら)の里に軟着陸したいものだ。